

あおむしの旅

救助犬ドーン



あおむしの旅 救助犬ドーン

杜 秋夫

杜の森工房

杜 秋夫

あおむしの旅

救助犬ドーン

星の輝きを少しずつ消していくように、東の空が明るさを増している。やがて、オレンジ色から薄黄色に変化した山脈の向こうの空が黄金色に輝き、まばゆいばかりの太陽がゆっくりと這い上がってきた。日の出だ。

昨日の激しい雷雨のため、雨水をたっぷり吸い込んだ大地から水蒸気が立ち上り、谷間一帯を朝もやの中に覆い始めた。キラキラと光り輝く朝露の玉がぼくのいる葉っぱの上にぽたんと落ち、葉っぱの中心をツーツと滑って、もう一つ下の葉っぱの上に落ちた。それに続けとばかりに、あちらこちらで水玉が、ツーツ、ポトンと地面に向かって落ちていく。ぼくは葉っぱの上から、その光景をぼーっと眺めていた。

太陽が谷間全体を照らし始めた時だった。

「きゃーっ！」

突然、山の上から女の人の悲鳴が聞こえた、と思ったら、

ドッシーン、

ぼくのすぐ上の枝が大きく揺れ、何かがぼくの目の前に落ちてきたんだ。

「うーん」

うめき声が聞こえる。ぼくはあわてて一番外側にある葉っぱまで這って行き、木の下を見てびっくりしてしまった。女の人が倒れている。

「あーっ、痛い！」

女の人が身体をよじるようにして、顔をしかめている。

どうしたのー、だいじょうぶ？

ぼくが大きな声で叫んでも、耳に入っていないみたいだ。どうしよう……。女の人から2メートルほど離れた岩の上に、赤いリュックサックが転がっている。女の人はそのを見つけ、立ち上がろうとしたんだけど、すぐに崩れ落ちた。

「あーっ、痛い、歩けない！」

女の方は苦しそうな顔をしたまま身体を横にねじり、そのまま目を閉じてしまった。

ねえ、だいじょうぶ？ 目を開けて！

ぼくは心配で心配で何度も呼びかけたけれど、女の方はぴくりともしない。気を失ってしまったのだろうか。

太陽はじりじりと容赦なく大地を照り続けている。幸いにぼくのいる木の枝葉が、女の人をふりそぐ太陽光線から遮っている。この辺は日陰に入りさえすれば、けっこう涼しいんだ。少しは落ち着いたのかな？ 女の方は目を閉じたまま少しも動く気配がない。

オレンジ色に輝きを増した太陽が稜線の真上で更にその輝きを増し、山や谷全体が紅く染まってきた。もうすぐ陽が落ちると思った時だった。どこからともなく一匹の犬が現れた。その犬はしばらくその倒れている女の人を見つめていた。やがて女の人に近づくと、女の人を顔をぺろぺろと舐め始めたんだ。それに気が付いたのか、女の方は

「う、うーん」

と声をあげ、その犬の方に顔を向けて目を開いた。

よかったー、気が付いたんだ。

「た、助けて！」

女の方はその白い犬を怖がっている。その犬は、クーン、クーンと声を出しながら、女の方の頬をぺろっと舐め、すぐその横に座った。

犬の首には赤い首輪が着いていて、その首輪に何か文字が書かれているみたいだ。ぼくは枝の先端の葉っぱまで這って行き、もう一度首輪を良く見てみた。ちょっとかすれてはいるけれど、丸い印の中に救という字が、その横にアルファベットでドーンと書いてある。女の方が

「あなた、ドーンっていうのね……。救助犬なの？」

と話し掛けると、ドーンは

「クーン」と鳴いて、悲しそうな目で女の方を見た。

「救助犬なら、お願い、助けて！」

苦しそうな息の下でやっと言葉に出している。

「そ、そこのリュックを取って……」

近くの岩の上に、いまにも谷間に落ちそうなかっこうで赤いリュックサックが転がっている。それを見たドーンはスーッと立ち上がると、リュックサックのベルトを口でくわえ、女の方の横まで引きずって来た。ドーンからリュックサックを受け取った女の方はリュックの上蓋を開け、中に手を入れてなにやら探し始めたが、

「あーっ、無い、携帯がない！ それに食べ物も……」

と絶望的な声をあげた。するとその様子を見ていたドーンがスーッと立ち上がり、しばらく周囲を見回していたが、何を思ったのかとぼとぼと歩き出し、森の中に入って行った。

太陽が稜線の下に沈み、オレンジ色に輝く西の空から藍色の天空に向かって、みごとなグレーションが空いっぱいに広がった。長い夜の始まりだ。気温がどんどん下がり始めている。女の方は仰向けのまま、少しずつ明るさを増す星々を眺めてつぶやいた。

「眠っては、眠ってはだめ……」

そう、誰かが助けに来てくれるまでは頑張っていなくちゃ。

「ゆ、裕介、ごめん。ママを許して」

この人、子供がいるんだ。じゃあ、なおさら早く帰らなくちゃあ。でも、こんな山の中に助けなんて来てくれるかしら。ぼくは急に不安になってきた。

どれくらい経っただろうか。ぼくの後ろの方からザーっとなにかを引きずるような音が聞こえてきた。ゆっくりと音のした方に顔を向けると、何かをくわえているドーンの姿が目に入った。

あっ、ドーン、ドーン、こっちだよー！

何かの枝をくわえているみたいだ。それを引きずりながら、ゆっくりとこちらに向かって歩いて来る。

ドーンはその枝の束を女の人のお腹の上に置くと、反対側にまわり、更にその枝の先を口で引っ張って女の人のお腹の上にのせた。よく見ると、枝と枝の間に苔ももの実がいくつかがぶら下がっている。

「ありがと、ドーン……」

幸い女の人のお腹は擦り傷程度ですんだらしく、両手を伸ばして苔ももの実を胸の上に置き、一つとって口の中に入れた。

「おいしいー」

女の人のお目から涙が溢れてきた。

「あたし、助かるよね、きっと……助かるよね……」

うん、大丈夫だよ。きっと誰かが助けに来てくれるよ。それまでぼくもここにいる。それにドーンもいるから、安心して。

苔ももの実を一つ一つ美味しく食べる女の人のお口元を、ドーンはじっと見つめている。ここでドーンがじっとしているということは、この近くには救助隊がないということかもしれない。それにしてもドーンはいったい何処から来たんだろう。不思議な犬だなあ。

満天の星空の下、苔ももの木の葉っぱを被ったまま、女の方はじっと目を閉じている。そのすぐ隣りでドーンが女の方にぴったりと体を寄せた格好で眠っている。静かな時間が流れ、すべてのものがゆっくりと北極星を中心に回転し始めた。

明け方、女の方のおすぐ横にある金柑の木の葉っぱの上でぼくは目を覚ました。東の空が薄黄色に染まっている。けれど、まだ太陽は上がってこない。

女の方はたまにうーんと声を出して、顔を右に向けたり左に向けたりしている。ちょっと苦しいのかな？でも、ぼくにはどうすることも出来ない。ただそばにいて見守ってやることしか……。ドーンは女の方の身体に自分の体を寄せたままじっとしている。

太陽が東の空に上がって来たころ、再びドーンの姿が見えなくなった。そして一時間ほど経ったころ、ドーンはまた苔ももの枝を口にくわえ、引きずりながら戻ってくると、それを女の方のお手元に置いた。

「ありがとー、ドーン」

女の方が目に涙を浮かべてドーンに言うと、ドーンも

クーン

と鳴いてそれに応えた。‘いいんですよ’って、精一杯の笑みを浮かべて。

女の方は苔ももの枝を引き寄せ、実を一つ手に取って口に持っていった。そしてもう一つ。女の方は苔ももの粒を口の中で味わいながら、ぼつりぼつりと話し始めた。

「あたし、けっきょく無茶しちゃったのね……」

何があったか、ぼくにはちっとも分からないけど、でも、どうしてこんな山に来たの？

女の方はドーンの顔を見、そしてぼくの方を見て言った。

「そこにもいたのね。あたしは一人じゃあないのね」

そうですよ。一人じゃあないですよ。ドーンもぼくもそばにいるから。元気を出して。

女の方は時々痛そうに顔をしかめ、よく晴れ渡った空を見上げながら言った。

「仕事がうまくいなくて。むしゃくしゃして何かしなければいられなくなったの」

ストレスがたまっていたんだね。

「昔登った山にもう一度登ってみたくなくて。裕介をおばあちゃんに預けて来てしまった……。

でも、一人で登れるような山じゃあないわね」

うーん、一人で入る登山者もいなくはないけど、でも、危険だよ。

「たしかに無茶だったかも。でも、でも、助かりたい……」

女の方は両手を顔に当てて泣きだしてしまった。元気を出して、絶対に助かるから。ぼくの予感はずこなく当たるんだよ。

昼ちかくなって、ドーンはスーッと立ち上がり、またどこかに消えてしまった。そして、西に傾き始めた太陽がオレンジ色に輝き出したころ、ドーンはまた何かの枝をくわえて現れた。今度は今朝の苔ももよりも粒の大きい苔ももの枝を、何処からか運んできたんだ。

「ありがとー、ドーン」

女の方は手を伸ばしてその枝をつかみ、自分のお腹の上へのせ、その枝から苔ももの実を取ってゆっくりと口に持っていった。

「美味しいー、ほんとに美味しい」

女の方の目から涙のすじが頬を伝って葉っぱの上に落ちた。

ぼくの頭の上で、一つまた一つと星が輝き始めたころ、ぼくはそっと女の方の顔を覗いて見た。女の方は苔ももの葉っぱを身体の上へのせ、仰向けになって目を閉じていて、その横でドーンがぴったりと寄り添うように眠っている。幸いなことに、ここ二日間というもの穏やかな日が続いているので、苔ももの葉っぱに覆われている限り、体温が下がることも無さそう。そのうちにきっと救助隊が来てくれると思うよ。

翌朝、ぼくは濃い霧の中で目を覚ました。谷間一帯が霧に覆われていて何も見えない。ただ、ぼくのいる木の下に女の方とドーンの姿だけがボーッと霞んで見える。

静かな朝だ。いや、すこし静か過ぎるくらいだ。物音ひとつしない。全ての音波が無数の白い粒子に吸収されてしまっている。

どのくらい経っただろうか、ぼくの皮膚が空気の流れを感じた。そして、ぼくの視界の中に谷間の姿が少しずつ現れ始めたんだ。真っ白だった霧が幾筋もの白い流れになって山肌を這い上がって行く。

あれ？ あれは何だろう？

上昇する霧の中で何か黒いものがゆらゆら揺れている。その黒いものは真っ直ぐこちらに向かって進んでいるようだ。

あっ、あれは、熊のゴンだ。熊の仲間の中でも最も凶暴なボス熊と恐れられているやつだ。

だめだよー、こっちに来ちゃあ！

「ウー！」ドーンが耳をピンと立てて低く唸った。

「どうしたのドーン、何かあるの？」

女の人がドーンの顔を見て言った。

「ウー、ウワン！」

ドーンが一声吠えたのと同時に、

ドドドドー。

と地響きがし、黒い塊がこっちに向かって突進して来た。

「きゃー！」

その姿を目にした女の人が悲鳴をあげた。

あーっ、だめだよー。危ないー！

その時だった。地面に伏せていたドーンが立ち上がるや否や、猛然と黒い塊に突っ込んでいった。

「グオー！」

ゴンの声が谷間中に響き渡った。次の瞬間、

「キャン」

ドーンが悲鳴をあげ投げ飛ばされた。

あーっ、ドーン！

ドサッと草の上に落ちたドーンの背中から血が流れ出てきた。ゴンの鋭い爪で裂かれたようだ

。

あっ、あれ？

ぼくはゴンの顔を見て驚いた。ゴンの右目から血がしたたり落ちている。どうやらドーンが跳ね飛ばされる前に、ゴンの顔に噛み付いたらしい。ゴンの顔の右半分がみるまに血で真っ赤になった。

「ウオーー」

ゴンは唸り声をあげながら、もう一つの目で女の人を睨みつけ、どしんどしんと音を立てて近づいて来た。

「きゃー！ 助けてー！」

女の方は恐怖にかられて叫び声をあげた。

その時だった。傷を負ったドーンがフラッと立ち上がり、再びゴンに突っ込んだんだ。

あーっ！

ぼくは思わず目をつぶってしまった。

「グワー」

ゴンが大きな悲鳴をあげた。立ち上がったゴンの首にドーンが噛み付いている。そして、ユラー。ゴンの体が大きく揺れた瞬間、ゴンは岩の上であお向けにひっくり返り、そのまま谷底に落ちていった。ドーンは最後までゴンの首に噛み付いたままだった。

白い雲がゆったりと流れ、その影が緑の山肌の上をゆっくりと移動していく。どれくらい経っただろうか。女の方はあお向けに寝たまま目をつぶっている。時々目から涙がツーッと頬を伝わり、乾いた地面にぽとりと落ちた。

「おい、あそこだ。あそこに何かあるぞ！」

突然、山の上の方から男の太い声が聞こえた。

「おーい、いたぞー！ その木の下の下だ」

女の人もぼくもびっくりして声のする方を見ると、オレンジ色のつなぎを着た男の人が二人、すすするーっとロープで降りて来た。それに気が付いた女の人が出た。

「助かったのね……」

そうだよ、助かったんだ。ぼくの言う通りだろー。あの人たちは山岳救助隊の隊員だよ。隊員の一人が走り寄って来て、女の人に尋ねた。

「川谷春奈さんですか？」

「はい、そうです。川谷です。すみません」

あとは声にならない。

「捜索願いが出ています。もう大丈夫ですよ。私は山岳救助隊の林田です」

隊員はそう言うと、女の人の上を覆っていた苔ももの枝をそと取り除いた。

「足を怪我していますね」

「はい……」

「痛みますか？」

「ええ、少し」

「そうですか。もうちょっとですから、頑張ってください」

「はい」

そこに別の救助隊員3名がロープを伝わって下りてきて、林田隊員の周りに集まった。林田隊員は女の人の上からそと登山靴を脱がしてから、足が動かないように添え木で固定し、若い隊員に向かって言った。

「ここから上に引っ張りあげるのは無理だな。救助ヘリの出動を要請しよう」

「はい、連絡します」

そう応えた隊員は、肩から無線機を外し連絡を取り始めた。

「救助ヘリ‘あかぎ’は今出動中で、‘はるな’をこちらに向かわせるそうです」

‘はるな’か。到着するまでにちょっと時間がかかるな」

そう呟きながら立ち上がった林田隊員の目に飛び込んで来たものがあった。

「うっ、あれは？」

斜面から突き出ている岩の上の血のあとが目に入ったんだ。

「こんなところに血のあとが！ まだ新しい」

「それは一、熊の血だと思います。犬が、犬が私を熊から守ってくれたんです」

春奈さんが説明した。

「犬？ ですか？ こんなところに？」

不思議そうな顔をして林田隊員はそう言いながら、岩のそばに転がっている何かに目を止めた。

「これは！」

あっ、それはドーンの首輪だよ。ゴンと闘った時に外れたんだ。

林田隊員はそれを手に取り、女の人に見せながら言った。

「これは、その犬の首輪ですか？」

「ええ、そうです。ドーンの首に着いていたものです」

「えっ、ドーンですか？」

隊員たちはお互いに顔を見合わせながら、げげんそうに聞いた。

「その犬が、この首輪をしていたんですか？」

「ええ、そうです。私を助けるために熊と闘っていた時に、きっと外れたんですね」

再び首輪を見つめた林田隊員が、もう一人に言った。

「これは確かにドーンの首輪だ。ここに○救ドーンと書いてある」

「確かにそうですね。しかし、ドーンはあの時……」

「ああ、行方不明になったままだ」

それを聞いていた春奈さんが気になったのか、顔を隊員の方に向けて尋ねた。

「あの一、行方不明って？ 何か」

林田隊員はその首輪を見つめたまま話し始めたんだ。

「はい、去年の冬に行方不明になった犬です。当時山は大荒れで、山岳パーティの 하나가雪崩に遭い遭難してしまっただんです」

「遭難？」

「ええ、雪崩に飲み込まれて。遭難者は二名でした」

林田隊員は谷間の方に顔を向け、深呼吸をひとつして続けた。

「我々救助隊と救助犬のドーンが捜索に出たんですが、遭難者二名を発見し、ドーンが真っ先にその二名のところに駆けつけたところに、すぐ横の斜面で表層雪崩が発生したんです」

「表層…雪崩ですか」

「はい、ドーンはその二名の遭難者とともにこの下の谷に流されました。その後二名は遺体で発見されましたが、ドーンは発見されませんでした」

ふーん、そうだったのか。でも、ドーンはゴンに襲われそうになった春奈さんを身を呈して守ったんだ。

「それじゃあー、ドーンはいったい何処から現れたんでしょうか……」

「分かりませんねえ。後でもう一度谷の下の方を探してみましよう」

パタパタパター。

山の向こうからヘリコプターの回転翼の音が聞こえてきた。

「ヘリが来ましたね。ウインチで吊り上げますから、足は動かさないように」

「はい」

救助ヘリコプターが、ぼく達から少し離れたところでホバリングをしながら何かを地上に下ろすと、若い隊員がそれを拾い上げ、広げながら女の人に言った。

「さあ、これを身体に着けます。ちょっと身体を起こしますよ」

春奈さんは救助用ベルトを身体に装着され、ぼくのいる木の下からヘリコプターの真下に搬送された。

ヘリコプターに吊り上げられる直前、春奈さんはぼくの方をちらっと見たんだ。その顔はまだ緊

張しているけれど、でもようやく助かったという安堵の表情がありありと見えた。

よかったね、春奈さん。ぼくの言ったとおり助かっただろ。帰ったら、裕介くん、きっと大喜びするよおー。

スルスルーと身体が上昇し、やがてヘリコプターの内部に消えた。地上の隊員が親指をクルクルと廻し、ゴーサインを送ると、救助ヘリコプターは機首をゆっくりと南に向け、轟音とともに飛び立ち、やがて前方に広がる山並みの向こうに消えていった。

その後隊員たちは現場の写真を何枚か撮影し、用具をかたづけ始めた。

「彼女を助けた犬は、本当にドーンだったんだろうか？」

「不思議な話しですね。でも、これは確かにドーンが着けていた首輪です。間違いありません」

「じゃあ、何処かで生きていたのか……」

「もしそうだとすれば、きっと戻って来ると思うんですが」

「そうだろうな。しかし、誰一人としてドーンの姿を見たものがないんだ」

「ドーンはあの二名の遭難者を救うことが出来なかったことを悔やんでいたかもしれないね」

「それで、あの女性を助けたっていうわけか」

救助隊全員が引き上げたあとには、風の音もなく、ただ静寂さだけが残った。そして、西に傾いた太陽がオレンジ色に輝きながら山の向こうに沈んでまもなく、

クオーン、クオーン

とドーンの鳴き声が谷間中にこだましたんだ。ぼくは谷間に向かって、

ドーン、ドーン、何処にいるのー！ドーンが春奈さんを助けたんだよー。

と大きな声で叫んだ。ドーンはぼくの声に答えるかのように、

クオーン、

と返事をしてくれた。これが、ぼくの聞いたドーンの最後の声だった。

(おしまい)